

蘇る武士道野球

—刀からバットにその精神を移して—

橋本 伸太郎

1 はじめに

2017年12月9日に日本ハムファイターズの大谷翔平選手は、エンゼルスへの入団会見を行い、夢であったメジャーリーグへの扉を開いた。アカデミー賞さながらの舞台での彼の振る舞いは、紳士的であると現地アメリカで大変好評価を受けている。彼の振る舞いに見られるように、日本においては野球の技術以前に礼節が重んじられる。大谷選手の人気の裏には、この人格という面が大きく関わっているのである。アメリカ発祥のベースボールは、日本で人格養成の野球へと変容した。そんな日本の野球は度々賞賛的となるが、その裏で長時間練習による怪我などで選手生命を終わらせてしまう選手が後を絶たないことが近年問題となっている。科学技術が進歩し、指導方法も合理的になった現代においても、なお昔からの長時間練習の文化が残っているのは何故なのだろうか。

本論文では、柔道や剣道などの武術に代表される一対一の日本の運動文化の中で、どのようにベースボールが浸透し野球となっていったのかをまとめ、その随所から見られる日本人が持つ価値観を明らかにする。そして、科学による近代的野球指導論が叫ばれる中で、世俗化しつつある古来の武士道野球の持つ価値観について実例を用いて考察する。第2節では、ベースボールが生まれた国であるアメリカの歴史を追い、ベースボールが誕生し、国を代表するスポーツとなった経緯、そしてアメリカ式ベースボールの特徴を明らかにする。第3節では、平岡照と2人の外国人教師によって伝えられたベースボールがどのように日本に根付いていったのかを追う。第4節では、ベースボールを受け入れ、それを独自のものに昇華させた日本人の持つ文化的土壌に関して説明する。第5節では、現状の日本野球の問題を指摘し、それに対して起きている議論をまとめ、未来の日本野球について考察する。最終節では、まとめとしてこの論文を総括する。なお、本論文ではベースボ

* 社会科学総合学術院 花光里香教授の指導の下に作成された。

ールと野球は異なるものとして扱う。

2 アメリカ式ベースボールの歴史

2-1 アメリカ式ベースボールの起源

ベースボールは、下投げの緩い球を打つタウンボールというゲームが昇華したものである。1840年代、ニューヨークのマンハッタンで働くアレクサンダー・カートライトは、ボランティア消防団を作り、タウンボールを健康と運動能力保持の目的で取り入れた。ここにルールが加えられていったものが、ベースボールの下地となる。1850年代に入り、ベースボール熱は都市の過密化に伴い、ブルックリンに移転した時に急騰する。それは、ヨーロッパ大陸での革命や飢饉による移民によりブルックリンの人口が急増し、仕事合間の気晴らしにベースボールが求められたからであった。しかしながら、次第にベースボールは賭けの対象となりゲームの質が著しく落ちた。勝つためにイカサマをしたり、八百長をしたりするものがでてきたのである。試合に勝利するために専属のプレーヤーを金で雇う者もあり、アメリカのベースボールは、野球を精神鍛錬の場とし不正を嫌った日本の野球黎明期とは全く別の発展の仕方を遂げることになる（佐山, 2007）。

2-2 鉄道と戦争が作り上げた野球人気

ベースボールの普及に多大なる功績を残したのは、鉄道と南北戦争である。この時期アメリカ東部では鉄道が急速に進歩し、普段野球を観に行けないファンを呼ぶことができただけでなく、ゲームを様々な街へと移動させる道具としても機能したのである。しかしながら、ベースボールの発展に最も貢献したものは、1860年から65年までの南北戦争である。北軍でも南軍でも、兵士たちは戦地での余暇にベースボールを楽しんだ。集団競技であるベースボールは隊員のコンディションと軍の紐帯を高める目的で行われていたためである。ベースボール人気は北軍南軍の壁を越え、両者で試合を交えるまでになった。戦地でベースボールを覚えた兵士たちが、戦後それぞれの郷里にベースボールを持ち帰ったことによって、ベースボール熱が一気にアメリカ全土に巻き起こったのであった。また、ベースボールには、南北戦争を経て軍隊のエッセンスが付け加えられる。例えば、一人の監督の下で部員全員が動くこと、作戦を盗みサインを解読するなど利用できるものは全て利用し、勝利を得る軍隊の要素が加わったとされる。作戦だけでなく、ベースボールのユニフォームの原型が南北戦争の軍服をベースにしているということからも、南北戦争がベースボールの発展に与えた影響を垣間見ることができる（佐山, 2007）。

3 日本の野球の歴史

3-1 渡来人によって日本に伝わるベースボール

アメリカでは、ベースボールが職業野球として生まれ、戦争を通してその人気を高めたが、日本の野球は学生スポーツを中心に発展してきた。ベースボールの伝達経路は、アメリカ人教師由来のものと平岡燾によるものの2種類があるといわれている。近代化を突き進む日本の教育では、知識教育に主眼が置かれ体育教育は軽視されていた。そのため、運動によって活気、精力、男らしさを身につけ、これからの日本を背負う人材を育成しようとする目的から、ホーレス・ウィルソンによってベースボールが取り入れられた。当時の日本には集団スポーツであり、なおかつ武道に見られるような個人スポーツがなかったため、学生にとって大変人気が高かった。しかしながら、野球に熱中していく過程で、日本を背負うエリートの第一高等学校（現東京大学）の学生らは、私的欲求を満たすものとしてしか捉えられていなかったベースボールに打ち込む正統な理由を、学生や教師の倫理観の範囲内で探求した。その結果が、精神を高め合う学生野球へと発展する礎を築くことになるのである。その中で、イギリス人教師フレデリック・ストレンジは、フェアプレーの精神を日本の野球に盛り込んだ第一人者である。彼はスポーツにはフェアなスポーツマンシップ精神がなければならないことを熱心に説いた。ストレンジが学校教育における講演をした際に、主に次の8つのことを述べている。

- (1) 定刻を厳守せよ。
- (2) 奮闘努力せよ。負けても、負け惜しみをいうな。
- (3) 競技は公明正大にやれ。卑怯なことをするな。
- (4) 審判に服従せよ。人は神に非ず。時に判定謝ることもあるが、異議を唱えず、冷静を保て。
- (5) プレーを楽しめ。自分より優れた相手を敵視するのではなく、師とせよ。
- (6) 商品は記念品のみにせよ。
- (7) 儉約はスポーツマンの第一信条。他人に憐れみを乞うてまでして贅沢をするものではない。
- (8) 練習は学業の暇にせよ。そして、練習場に立った時には、さっさと練習して、終わったら速やかに去れ。長く残っていても気迫が弛緩するだけだ。克己、節制、制欲、忍耐、勇敢、沈着、敏活にして機知縦横、明快にして気宇壮大、これらの気質特性こそ、点がスポーツマンに与える最高の商品ではないか。

(佐山, 2007, pp. 43-48)

こうした義、勇、仁、礼、誠、名誉、忠義、克己などの日本古来より伝わる武士道精神に通じるストレンジの教えは、日本のベースボールが紳士的なスポーツとして発展してい

く礎を築いたのである。彼らが学生たちに教えたスポーツが、こののち大いに愛好者を増やし、やがて彼らの学校だけではなく他の学校へ、そして全国の大学、高等学校、そして中等学校へと広まっていくこととなる（佐山, 2007）。

3-2 日本人留学生によって持ち帰られるベースボール

ウィルソンによってベースボールが伝達されたことに加え、留学生がアメリカから本場のベースボールを持ち帰ったことが、ベースボールが日本に伝来した2つ目の説である。アメリカに留学していた平岡燾は明治9年に帰国すると、神田区三崎町（現千代田区三崎町）の練兵場で本場直伝のベースボールをやり始めた。そして、明治10年に工部省（明治18年廃止）の新橋鉄道局に勤めると、翌11年に鉄道関係者や外国人技師などを集めて、日本最初のベースボールチームである「新橋アスレチックスクラブ」を組織した。ベースボールは、この新橋クラブの影響を受けて都下の学校に普及する一方で、球界の覇権を握っていた新橋倶楽部は、明治20年平岡が新橋倶楽部を退職すると、間もなくチームは解散してしまう。新橋のグラウンドも鉄道のレールが敷かれる用地とされて消滅し、後に残ったのは学生たちによる野球の道だけであった（有山, 1997）。

3-3 学生野球の起こり

明治20年になると、一高がチームとしての体を成し、翌22年9月には、向ヶ岡（現東京都文京区弥生）に約6000坪のグラウンドが作られるまでになった。一高は明治23年に、世間から受ける歪んだ風俗の乱れの影響を断ち切り規律のとれた学生を育むため、木下廣次校長指導のもと全寮制となった。3月に学生の自治性を認めた寄宿舎ができると、ベースボール会員の大半が入寮し、学生生活だけでなく寝食をも共にし、練習に励むという「一高の籠城主義」ができていく。その時の木下廣次校長の趣旨説明は以下のような内容である。

- (一) 自重の念を起こして、廉恥の心を養成すること
- (二) 親愛の情を起こして、公共の心を要請すること
- (三) 辞讓の心を起こして、静肅の習慣を養成すること
- (四) 摂生に注意して、清潔の習慣を養成すること

（佐山, 2007, pp. 108-109）

この時の校長の告示が、以後も学校と寄宿寮が一体となった「向陵」の精神として、学生たちに受け継がれ、さらに明治33年に五寮が完成したあとは皆寄宿制となり、ますます独自の文化規範を養成してゆく。規律のとれた寮生活は、日本野球に上下関係や礼儀作法などが流入するひとつの要因であると考えられる。ルールを尊重し、チームとしての規律を重んじ、イカサマを嫌うという特徴は、野球の上流階級の学生スポーツとしての発

展、フェアプレイの精神を伝えたストレンジの存在が、ベースボールを野球足らしめた所以である。しかしながら、これに加え、当時のこの「籠城主義」によって学校の規律と野球選手像が融合したことが、日本独自の野球観というものを発展させたと考えられる。

3-4 野球道となる日本野球

この当時、他校との試合は学校の威信をかけた試合と認識されていたため、ベースボール会の燃ゆる決意は構内に反映し、同じ想いが一高全校生にもみなぎって、ベースボールは一高の「校技」となる。彼らのベースボールが特別なものとなったのは、学校がベースボールを武道とみなしていたことに起因する。有山（1997）は、ベースボールを武道と結びつけた考え方は「勝利至上主義」「精神主義」「集団主義」の3つのイデオロギーを日本野球にもたらしたと主張する。こうして日本のベースボールは、一高によって「遊技」から「運動」「体育」へ育て上げられた。明治29年5月23日、一高は横浜在留外国人で組織された横浜倶楽部に29-4で勝利し、日本人の長年の治外法権に対する鬱憤を一気に晴らした一大快事となる。このように当時不平等条約を押し付けられていた日本にとって、ベースボールは個人的な楽しみを超えて日本という国の国威発揚を表す道具として機能したのである。栄華を極めた一高野球は、のちの早慶他六大学の台頭により主役の座を明け渡すことになる。しかしながら、その精神は一高出身で早稲田大学監督となった飛田忠順によって脈々と受け継がれていく（菅野, 2003）。

3-5 野球という訳語

野球の略語に関わった人物は、一高から生まれている。明治23年に一高の二塁手を務めた中馬庚は、帝国大学（現東京大学）在学中の明治27年、一高の部史を編纂するにあたり、“Ball in Field”のイメージから「ベースボール」の略語として「野球」の名称を作った。そして翌28年2月、その一高の部史を『野球部史』と題して発行し、本文中の「ベースボール」の言葉をすべて「野球」と記載した。また、明治17年に東京大学予備門（一高の前身）に入学した正岡常規（正岡子規）は、一高卒業後、新聞「日本」に連載された随筆「松蘿玉液」の中で、明治29年7月19日から3回にわたり、ベースボールについての詳細な解説記事を書いた。これは全国に広くベースボールという競技を紹介することとなり、この記事において、「死球」「四球」「直球」「飛球」「打者」「走者」などの用語を訳出した（菅野, 2007）。

3-6 死の練習

学生野球でも特徴的なのが地獄のような練習である。飛田（1974）は「日本の学生野球は修養の野球であり、修養の野球は趣味をすら超越し、多くの総合苦痛の野球でもあり虐

待の練習ともなり、涙と汗と血の連続によってようやく選手の地位が保たれる。」(p. 24)とし、その端緒を一高野球に求める。明治30年、青井投手が卒業すると、一高の2度目の栄華は絶たれてしまった。負けが続き、この年に入学した守山投手は猛練習に励んだ。コントロールを克服するために、真夜中に一人投球練習をおこなった。過度な疲労により左腕が曲がったまま伸びなくなる時があると、グラウンドの老桜の枝にぶら下がってその左腕を伸ばした。そして、毎日300球ほど投げ、ついに正確なピッチングができるようになったのだ。このように一高の練習ぶりは超人的で、まさに「死の練習」とでもいべき凄まじいものであった。彼らは常にミットを用いず、素手、空脛、素足で練習をした。一高の練習では「痛い」という言葉が不名誉とされていたため、「痒い」という反語を用いていた。拳が破れて手にするボールが鮮血で染められても、練習は間断なく続く。流れる指頭の血を舐めながら、「どうも痒くてたまらない。」と我慢し、指頭を布で巻いてそのまま練習を続けるのである。一高の練習は季節など関係なく、雨の日、風の日、雪の日、あられの日、どんな悪天候であっても練習を欠かさない。1年を通じ、授業の前後の時間は練習に捧げ、明け方から夜になるまで一高生徒先輩に見守られ、激励され、心身ともに耐えられなくなるまで練習する。これが彼らの修行であり、人々は獐猛なる一高式練習と呼んだ(佐山, 2007)。

4 ベースボールを受容する日本人の価値観

4-1 個人スポーツ中心の日本

日本にはそれまで集団で勝負をつけるような競技がなかった。杉本とマオア(1982)は、日本の伝統スポーツにふれつつ、次のように述べている。

運動競技についていうと、日本の伝統スポーツは、相撲、柔道、剣道など一対一のもものがほとんどだが、欧米のものは野球、サッカー、ラグビー、クリケット、バスケットボール、フットボール、みんな集団競技ばかりではないか。最近、日本に輸入されて人気のあるのは、ゴルフ、テニスなど個人ゲームが中心である。(p. 189)

このように、剣道、柔道、合気道などの日本古来の武道は一対一の試合形式で行われており、現在国技と呼ばれるようなスポーツには集団でぶつかり合うものがない。また、明治19年の正岡子規の手記からも、当事りの子供たちの遊びにおいていかに野球というものが物珍しかったかがわかる。正岡(2003)は「運動となるべき遊戯は日本に少なし、鬼事、隠れっこ、目隠し、相撲、撃剣位なり」(p. 52)とした上で、「運動にもなり、しかも趣向の複雑したるはベース、ボールなり。人数よりいふてもベース、ボールは十八人を要し、随て戦争の烈しきことローン、テニスの比にあらざ」(p. 53)と述べている。ここからも、集団競技、集団スポーツと呼べるようなものが、日本の伝統的な遊びの中にあまり見られ

ないことがわかる。ここに野球は集団競技でありながら、個人対個人の対決に主眼が置かれているため、野球の中に日本型の「個人主義」的スポーツの伝統が潜んでいるのではないかという疑問が浮かび上がる。

4-2 個人主義と集団主義

日本にベースボールが野球として根付いたことには、日本が垂直的集団主義であることと関連していると考えられる。「個人主義 (Individualism)」と「集団主義 (Collectivism)」は、18~19 世紀のイギリスの政治思想家たちの間に登場した考え方である。トリアンデイス (2002) によれば、集団主義は、「密接に結びついた人々 (つまり、自分を一つ以上の集団 (家族、仕事仲間、一族、国) の一部とみなし、主に集団の規範や集団においてメンバーの団結を重視する人々) が織りなす社会的なパターン」(p. 2) と定義される。集団主義者は他者や集団と自分を結びつけることで、つまり集団の特性に焦点を当てることで自己概念を形成している。一方個人主義は、「緩やかに結びついた人々 (つまり、自分は集団から独立しているとみなし、主に自分の好み・要求・権利・他者と関係を持つ際にはまずそうすることの利点・欠点を合理的に判断することが重要と考える人々) が織りなす社会的なパターン」(p. 2) と定義される。つまり、個人主義者は自分の特質に注目することで、自己概念を形成しているのである。日本人は集団主義的傾向があるといわれており、集団主義の国では人々はより集団的な要素 (例えば、自分の仕事集団は私がこうすることを望んでいるという考え) を備えており、社会的状況に意味を与える際にこうした要素を利用する傾向がある。集団主義の要素として、(1) 自己よりも内集団の見方、要求、目標を重視、(2) 楽しみや個人的な利得によってよりも、社会的規範や義務によって行動を決定、(3) 内集団の中に共通の信念があること、(4) 内集団の成員との協力を喜んで行うこと、の4点があるといわれている (p. 7)。

さらに、集団主義は水平的集団主義と垂直的集団主義に分けられる。水平的集団主義文化とは、社会連帯の感覚や内集団との一体感があり、人々の地位は同等であることが求められる。一方で垂直的集団主義では、内集団に仕える、内集団の利益のために犠牲になる、義務で行うという感覚があり、不平等や地位に特権が認められる。トリアンデイス (2002) によれば、日本では「水平的個人主義が20%、垂直的個人主義が5%、水平的集団主義が25%、垂直的集団主義が50%といったプロファイルになるかもしれない」(p. 50) と推測されている。日本人は強い階層感覚を持っているため、垂直的集団主義の割合が高くであるというのである。この垂直的集団主義は、一高野球の至る所で確認される。例えば、校長の指導の下一高野球部全員で寮生活を共にし、集団としての考え方や振る舞うべき規律を身につけていったことである。また、野球が一高を代表する校技となった後、彼らはその栄華を守らんがため死の練習に耐え抜いたことから、個人的な利害を超えて、

社会規範や義務によって行動を決定する垂直的集団主義的傾向を確認できる。一高をはじめとする日本野球は、指導者の下チームとしてまとまって行動してきたことから垂直的集団主義があると考えられる。

4-3 中世武士の精神が残る日本野球

日本に野球が根付いた背景には、中世の武士の精神があると考えられる。伊藤（2009）は、「日本における野球というゲームを観戦する観点は、基本的に、ピッチャーとバッターの対一の「対決」に重点がおかれ、各プレイヤー全体の動きについては（解説者によってはきちんと考察することもあるのだが）ほとんど関心と呼ばないようにさえ見える。」と述べている（伊藤, 2009, p. 8）。

個人と個人の技のぶつかり合いという武道の特徴があるために、日本において野球がここまで大きな国民的スポーツになったということがわかる。中世の武士と武士の戦はそれぞれ軍隊を組織し行われていたが、いざ対決するときにはお互いの名前を名乗り合い一騎打ちで勝負を決めていたといわれる。また、日頃から武芸に関する鍛錬を怠らず、武芸の道の修行に励んだという。その武道の精神は中世の武士の始まりに起源を持っている。当時は武士道ではなく、「弓矢の道」や「弓矢取る身の習い」と呼ばれていたが、これは、戦場において武士がわきまえておくべき作法であり、名誉の観念のことを示す。武士にとって正々堂々の振る舞いをし、そして武勲・戦功を立てることの2つが両立できて初めて名を残すことができるとみなされていた。その中で、非常に高度な騎馬・弓射の術技なので、修練した武技を周囲に見せたいとの思いから、「一騎打ち」の概念が誕生する。つまりは、集団乱戦では個人の際立った技は隠れてしまうので、代表者による対一の戦いが行われるようになったのである。このように、礼儀作法に則り一騎打ちで武芸を披露した武士の流れがあったからこそ、投手と打者の一騎打ちのあるベースボールは日本人にとって身近であったにちがいない。また、メジャーリーグのように選手が個性的なフォームよりも、一般化されたフォームを様式美とみなすのも日本の道に代表される考え方から来ているのではないだろうか（笠谷, 2017）。

4-4 受け継がれ、昇華された一高精神

一高野球の精神を受け継いだのが、一高出身でのちに早稲田大学の監督となり早稲田大学黄金期を支える飛田忠順である。菅野（2003）は、飛田忠順の考える武士道野球を次のようにまとめている。

日本の野球は単なる趣味娯楽を超越して、魂を吹き込んだ修養の野球でなくてはならない。よってその目的や本文は試合場ではなく練習場にのみ存在し、自ら難行苦行の鍛錬に望むことにある。その鍛錬は苦痛であり、虐待でもあるが、絶えざる血涙と

汗水が野球に必要な純粹なる魂を生む。選手はチャンスにもピンチにも動ぜず、平常心で立ち向かえる不動の精神力と技術の向上、そして何よりも勝たねばならぬということを前提として、命をかけた死の猛練習をする必要がある。練習は選手完成の基本であり、練習のない野球は成り立たない。それは技術の上ばかりでなく、精神力を養う上においても練習の持つ力は最大最強なのである。そして相手に勝たんとすれば尋常一様の努力では足りず、相手を凌駕するに足る二倍、三倍の練習をしておかなければならない。(pp.174-175)

この精神が、日本野球の誕生から現在まで続く練習偏重の文化である。飛田が野球を道のようなものの一種として位置付けていることに、野球が単なるスポーツではなく精神滋養のものとして日本の中に受け入れられていったことがわかる。中世から明治維新まで脈々と武士の精神を形作って来た武士道は、魂を刀からバットに移して存在し続けている。

5 時代錯誤の一高野球

5-1 過度な投球問題

2013年の春に行われた選抜高等学校野球大会において、772球を投げた済美高校の安樂智大選手(現東北楽天イーグルス)は、NPBとMLBの国内外のプロから熱い視線を受けていた。しかし、同年9月22日の秋季県大会の1回戦に登板した際に右肘尺骨神経麻痺を起し、157kmを誇った自慢の球速は138kmに落ちるなど見る影もなくなってしまった。このように、高校野球では、将来を有望視された投手が過酷な練習環境により、若くして選手生命を終わらせてしまうことが多々ある。これは、プロ野球のように投手が潤沢におらず、かつ負けたら終わりのトーナメント方式であることに起因していると考えられる。安樂の他にも、横浜高校で春夏連覇を達成し甲子園の怪物と呼ばれた松坂大輔投手も、最後の夏の全国高等学校野球選手権大会において、準決勝の明德義塾戦の8イニングを除く全ての試合を一人で投げ抜いたなど、投手の酷使には枚挙に遑がない。彼はのちに渡米中に肘を痛め手術をしている。

5-2 完全燃焼の美学

高校野球の甲子園は、球児たちのメッカである。彼らは高校3年生の夏が終わるまで聖地巡礼ただ一点の夢を見て練習に励む。そのさきの未来よりも甲子園に比重が置かれることが多いため、勝負のかかった場面で投げない選択をすることが難しいのである。Jones(2013)によると、当時高校生であった安樂選手に取材をするためにアメリカからきたジョーンズ記者は、元中日の投手コーチの権藤博を取材した際、運良く斎藤佑樹(現北海道日

本ハムファイターズ)と繋いでもらうことができた。斎藤佑樹とはハンカチ王子の異名を持ち、夏の全国高等学校野球選手権大会で948球を投げ抜き早稲田実業を優勝に導いた投手である。彼は、権田の「マウンドで潰れるのなら本望だったか」という質問に対して「本望であった」と答えている。このように、甲子園のただ一点だけを見つめて何年も練習を積み重ねてきた高校生には、まるで戦場で殉職を遂げる兵士のような思いがあり、投げのをやめるという選択をすることが難しいのである。そのため、現状として投手の肩の酷使には、あまり改善策が見当たらず、運営側の日程の調整が主な対策となっている。別球場で開催し大幅な日程調整を図るという意見があるものの、甲子園がメッカように神格化されているため全国4000校の指導者が反対するだろうともいわれている。しかしながら、近年の産業界における長時間労働問題と呼応し、高校野球にもその視線が注がれている。この問題に対して真正面から警鐘を鳴らすのは、PL学園高校出身で巨人、ピッツバーグパイレーツを渡り歩いた桑田真澄である。桑田(2013)は、「科学的な裏付けのない誤解された指導哲学が長年当たり前のこととして継承されており、その意味ではどの競技においても指導理念の根源を一旦問い直す時期にきている」(pp. 249-250)と主張する。高校とプロと両方で輝かしい経歴を残してきた選手がこうして先陣を切ってこの問題に向き合うということは、官僚組織的な序列が形成されやすい垂直集団主義的日本野球にとって僥倖である。

5-3 ベースボールが見直す野球

投手に対する問題はなかなか解決が難しそうであるが、練習方法の改善が図られ、従来よりも効率を重視し、選手に考えさせる練習を行う学校もある。こうした学校は、科学的根拠に基づいた指導法を取り入れ、部員の自主性に任せた練習を行っている。春夏2回の甲子園出場経験がある京都翔英高校は、長時間練習に対して疑問を投げかける。この学校では普段の練習時間を夜の9時から夜の6時半までに変更し、睡眠時間を確保する目的で朝練をやめ、体調管理の観点から毎週1日休みを設けている。これは従来の高校野球の練習時間を考えると革新的な改革である。東大進学率全国1位の開成高校野球部も、理論に基づき一番勝つ可能性の高い打撃練習に時間を割き、取られても勝てるチームを作り上げ夏の都大会ベスト8に輝いた。また、東京ヤクルトスワローズの佐藤由規投手や、千葉ロッテマリーンズの平沢大河選手を輩出した甲子園常連校である仙台育英野球部は、まさに日本学生野球の新時代を担う前衛的な練習法を取り入れていた。竹田監督が練習に口を出すのは1年生に対してだけで、あとの上級生は自ら何が足りないかを考えて自分のメニューをこなす。竹田監督は「言われるのを待っていたら、いつになるかわからない練習法である」と自らの行う指導を説明している。その精神は佐々木監督になってからも、「ポジティブ野球」として根付いている。このように、仙台育英のような強豪校が選手の自主性

を重んじメニューを選手に決めさせることで、他の学校へも良い影響があるはずである。監督が選手を統率する垂直的集団主義である学生野球であるからこそ、このような事例を受け、改革に舵を切る指導者が増えることを願ってやまない。

5-4 不祥事

PL学園時代には、甲子園で5本の本塁打を打ち日本中の注目の的になった元巨人の清原和博は、2016年覚醒剤取締法違反の罪に問われ懲役2年6ヶ月（執行猶予4年）の有罪判決を受けた。この事件でインパクトが最も大きかったのは、球界のスターで名球会入りも間違いなしといわれていた選手が薬物に走ってしまったことである。彼には明らかに自身の違反に対する影響への想像力が欠けており、かつての日本の武士道野球の面影もない。佐山（2007）は、ベースボールの生まれたアメリカが今やステロイドにまみれ、非常に醜いものになってしまったため、ベースボールを生んだアメリカに日本の武士道野球を逆輸入すべきではないかと主張しているが、むしろ国内を一度締め直し、武士道野球の精神を改めて取り戻さなければいけないのではないだろうか。

6 まとめ

日本の野球は学生野球を入り口に流入し、武士道精神を継承する一高の中で生まれ、ベースボールから野球に変容した。これは、日本人の持つ垂直集団主義的傾向が、野球による学校の名声向上、アメリカに対する国威発揚の過程で働いたことによるものと考えられる。その野球も今では他に娯楽が増え、野球人口減少の一途をたどっている。そのため、部員確保のために練習時間を短く、頭髪の規定をなくす学校も増えてきている。しかしながら、経験則に従い旧来の方法に依存しがちな指導者が多いことから、旧態依然のままである。桑田・平田（2013）らが主張するように、野球の未来のためには指導方針を新しく変化させなければならない。そのためには、科学ベースの理論を下の少年野球からプロに至るまで取り入れ、選手自身の頭で考えることを奨励する必要がある。つまり、練習の仕方が従来の監督—選手の他律的指導から、選手自身が自律的に考える練習への変容である。この過程の中で、監督はチームを支える父親的役割から、トレーナー的役割に変容していこう。現在の指導法では、選手一人一人の主体性を奪い、考え工夫する力の発育を阻害するからだ。

加えて、野球人の振る舞い方というものを再確認するため、飛田穂洲の武士道野球を学ぶ必要がある。武士道の精神と科学に基づいた主体的練習が結びつくとき、心技体合わさった野球人になり、練習時間が短縮されることから、日本に野球を教えたストレンジの掲げる文武両道が全うされるのではないだろうか。これによって、プロになる以外に道がな

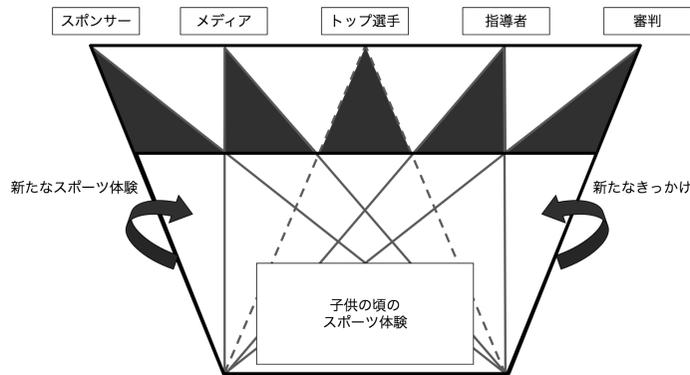


図1 平田モデル

出所：桑田真澄・平田竹男（2013）『新・野球を学問する』新潮社、より作成

いという現状の犠牲者を生み出しやすい日本の野球モデルは、平田（2013）の掲げる独自のモデル（図1）に変容することができる。野球練習の効率化により、従来の練習時間を休養や自身の勉強の時間に当て、プロになれずともセカンドキャリアを切り開いていけるような土壌を醸成できるからだ。このモデルは、平田（2013）の「プロだけでなく、野球に関わる他の道を模索できるようになるべきだ、プロスポーツ選手だけがゴールではない」（p.35）という考えを明確に表している。

これに加え、メジャーリーグのように自由契約になった選手が大学教育を受けられるように、NPBは制度を改める必要がある。これによってセカンドキャリアを見直せる選手が増え、選手以外の道で野球に関わる人が増えることによってますますの野球の発展が図られるはずだ。

日本野球の将来に関して、桑田と佐山（2011）のように、素晴らしい日本の武士道野球をアメリカへ逆輸入すべきという考えもあるが、現状の汚職にまみれた日本野球ではそれも難しい。加えて、アメリカは隣国ドミニカなどの中南米諸国から、多額の契約金目的で野球移民がくることから、チームとしての規律を優先する武士道野球はなじまないと考える。野球で成功し、祖国の家族を養う目的でアメリカにくるプレーヤーは成績を追ってステロイドなど筋肉増強剤に手をだしている国とは前提条件が異なり、日本では国外に野球出稼ぎに行くことはなかったからである。むしろ日本のような修行の観念があり、ある程度国民に集団主義の傾向が見られ、なおかつ国が国威発揚のフェーズにある国に支援をすべきなのではないだろうか。日本野球の発展を夢見て野球用具の提供を行ったロバート・スポルディングのように、日本はアメリカから受け継ぎ、武士道精神をまとった野球を広めていく立場にある。いわば、日本の野球はベースボールと比べても劣っているところは全くなく、むしろ武士道野球という新しい道をゆく先進国なのである。中国やシンガポ

ル、ミャンマーなどのアジア地域へ野球を発展させていくために、日本の武士道野球は、伝家の宝刀となるにちがいない。

参考文献

日本語文献

- [1] 有山輝雄 (1997) 『甲子園野球と日本人—メディアの作ったイベント—』 吉川弘文館.
- [2] 朝日新聞デジタルホームページ『高校野球も変化の時代 夜間練習や上下関係見直す動き』
<http://www.asahi.com/articles/ASK766JVDK76PTIL01Q.html> (アクセス /12/1).
- [3] 朝日新聞デジタルホームページ『女子マネが打撃投手、変化球も自在 休部の野球部を再生』
<http://www.asahi.com/articles/ASK6W7VLZK6WOHGB014.html> (アクセス /12/1).
- [4] 朝日新聞デジタルホームページ『高校野球は男子の部活？違います 女子部員の役割も変化』
<http://www.asahi.com/articles/ASK716QH6K71PTIL01F.html> (アクセス /12/1).
- [5] 朝日新聞デジタルホームページ『「夏の甲子園」の陰で危うい高校野球の将来高校野球の部員数「減少局面」が鮮明に』
<http://toyokeizai.net/articles/-/183007?page=4> (アクセス /12/1).
- [6] 伊藤公雄 (2009) 「We, Japanese, gotta have WA—日本のスポーツ文化と [集団主義]—」 『スポーツ社会学研究』 第17巻: 3-12.
- [7] 伊藤聡 (2012) 『神道とは何か』 中公新書.
- [8] 江刺正吾・小椋博 (1994) 『高校野球の社会学—甲子園を読む—』 世界思想社.
- [9] 笠谷和比古 (2017) 『武士道の精神史』 ちくま新書.
- [10] 桑田真澄・佐山和夫 (2011) 『野球道』 ちくま新書.
- [11] 桑田真澄・平田竹男 (2013) 『新・野球を学問する』 新潮社.
- [12] 現代ビジネス (2012) 『Closeup 大越基「元プロ野球選手の“教えない流儀”」早稲高校監督』
<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/31926> (アクセス 2017/12/1).
- [13] 佐山和夫 (2007) 『日本野球はなぜベースボールを超えたのか「フェアネス」と「武士道」』 彩流社.
- [14] 週プレ NEWS (2017) 『変わりゆく高校野球一部活動の継続率は90%超！強豪校で野球部員の“やめない化”が進むワケ』
<http://wpb.shueisha.co.jp/2017/08/12/89897/3/> (アクセス 2017/12/1).
- [15] 週プレ NEWS (2017) 『変わりゆく高校野球—今どき“ヒップホップ好き”球児たちの甲子園ファッションとは？』
<http://wpb.shueisha.co.jp/2017/08/13/89899/2/> (アクセス 2017/12/1).
- [16] 菅野真二 (2003) 『ニッポン野球の青春』 大修館書店.
- [17] 杉本良夫・ロス・マオア (1982) 『日本人は「日本的」か—特殊論を超え多元的分析へ』 東経選書.
- [18] TIMELY! WEB (2017) 『【仙台育英】 ポジティブ精神でリベンジに燃える夏』
<https://timely-web.jp/article/1612/> (アクセス 2017/12/1).
- [19] 丹羽政善 (2013) 『済美・安楽の772球 米国人から見た高校野球 (上)』
<https://www.nikkei.com/article/DGXZZO57904680Q3A730C1000000/?df=3> (アクセス 2017/12/1).
- [20] 丹羽政善 (2014) 『選抜の772球、秋の故障…済美高のエース安楽は今』
<https://www.nikkei.com/article/DGXZZO64889640V00C14A1000000/?df=4> (アクセス 2017/12/1).
- [21] 飛田穂洲 (1974) 『学生野球とはなにか』 恒文社.
- [22] トリアンディス, H. C. 著 神山貴弥・藤原武弘編訳 (2002) 『個人主義と集団主義—二つのレンズを通して読み解く文化』 北大路書房.
- [23] 中島大輔 (2015) 『朝日新聞に質問。「甲子園絶対主義は変えられませんか」』
<https://newspicks.com/news/1092183/body/> (アクセス 2017/12/1).
- [24] 中村圭志 (2016) 『図解世界5大宗教全史』 デイスクヴァー・トゥエンティワン.
- [25] 日刊スポーツ (2017) 『カッコイイが1番！仙台育英の前衛的育成法／コラム』
<https://www.nikkansports.com/baseball/column/yuki/news/1871555.html> (アクセス 2017/12/1).

- [26] 藤井利香 (2016) 『革新的な練習方法を作り上げた仙台育英高校野球部 竹田利秋・元監督』
<http://sportsnomori.com/highschool-baseball/sendaiikuei-takeda.html> (アクセス 2017/12/1).
- [27] 藤田一照・伊藤比呂美 (2016) 『禅の教室』中公新書.
- [28] ベネディクト・ルース (2016) 『菊と刀』(越智敏之・越智道雄訳) 平凡社.
- [29] ホワイティング・ロバート (2005) 『菊とバット』(松井みどり訳) 早川書房.
- [30] 正岡子規 (2003) 『新日本古典文学大系 明治編 27 正岡子規集』岩波書店.
- [31] 松谷創一郎 (2017) 『“プロ部活”のための夏の甲子園—ますます空洞化する「教育の一環」』
<https://news.yahoo.co.jp/byline/soichiromatsutani/20170806-00074196/> (アクセス 2017/12/1).
- 英語文献
- [1] Jones, C. (2013) 『When 772 Pitches isn't enough』 http://www.espn.com/mlb/story/_/id/9452014/pitcher-tomohiro-anraku-future-japanese-baseball-espn-magazine (アクセス 2017/12/1).